

北九州大学外国語学部紀要
第九四号 抜刷(平成十年十二月)

天花藏主人編次宛如約について

古勝正義

天花蔵主人編次宛如約について

古 勝 正 義

はじめに

清初の小説『才美巧相逢宛如約』（以下、『宛如約』と称する）は、惜花主人の名で著録されるのが常であるが、惜花主人が誰であるかは明らかでない。一方、作風のうえで天花蔵主人の作品と類似することも気づかれている。しかし、それでは天花蔵主人とこの作品が如何なる関係にあるかという点については、きちんとした検証がなされていない。要するに、『宛如約』は作者不詳のまま残された作品の一つということになる。

作風が天花蔵主人作品と近いことから『宛如約』をその亜流のように見なす意見として林辰氏の所説をあげる事ができよう。林辰氏は、この作品の情節（筋立て）が『平山冷燕』や『玉嬌梨小伝』と酷似し、主題もそれらと密接に通いあっていることを指摘して、『宛如約』は天花蔵主人作品の影響を受けて作られたものであるとする。したがって、『宛如約』は、同氏が「天花蔵主人諸書録」にあげる『玉嬌梨小伝』以下十五部の作品とは、当然ながら別扱いとされている（『明末清初小説述録』一九八八）。

時間的には林辰氏に先んずるが、一歩踏み込んで『宛如約』の作者は『平山冷燕』や『玉嬌梨小伝』の作

者と同一人物であるかも知れないとしたのは、譚正璧・譚尋『古本稀見小説叢考』（一九八四）である。すなわち、「書中の文字（文章）がすこぶる典雅で、風格が『平山冷燕』『玉嬌梨』等とすこぶる似通い、同じ作者の手になった似くである」とあるのがそれで、『宛如約』の作者が天花藏主人である可能性を指摘したおそらく唯一のものかと思われるが、可能性の指摘にとどまり、論証のために筆墨を費やしてはいない。

譚氏を含めて、『宛如約』を天花藏主人の作品として正面から論じることがなかったのは、一つには信頼できる版本が見られなかったという事情もあるかと想像される。幸いにも言うべきか、日本国内にはこの作品の原刻本と認められる版本が存する。筑波大学附属図書館に蔵する「天花藏主人編次」と題した本がそれである。この本の存在は『宛如約』の作者問題の解明に一応の見通しをあたえるばかりでなく、これまでの材料では判定の困難な一部作品の天花藏主人（墨浪子）との関係の解明や、多くの作品を残しながら本名も経歴も明らかになっていないこの作者の人物特定にも新たな材料を提供すると思われる。

本稿では、この筑波大学附属図書館蔵本をもとに、版本の姿からしても、また作品の形式、内容、用語の面からしても、『宛如約』は天花藏主人（墨浪子）の手になったものと認定し得ることを述べる。

一

清末以後に出た版本はひとまずおいて、『宛如約』の初期の版本で現在所在が知られているものを、通俗小説の書目について見てみると、孫楷第『中国通俗小説書目』（一九八二）は中国科学院（現在中国社会科学院 文学研究所に蔵する「清初写刻本」とパリ国家図書館に蔵する酔月山居刊本を著録し、『中国通俗小説総目提要』（一九九〇）は中国社会科学院文学研究所に蔵する「清初写刻本」と南京図書館に蔵する酔月

山居刊本をあげる。大塚秀高『増補中国通俗小説書目』（一九八七）は筑波大学に蔵する△本衙蔵板▽本、中国社会科学院文学研究所に蔵する「清初？刊 写刻」の版本、および北京図書館・パリ国家図書館等に蔵する酔月山居刊本を著録している。△本衙蔵板▽本は他の書目には著録されないものである¹⁾。ただし、著編者については惜花主人をあげて天花藏主人の名は出さない。また、書目ではないが、春風文艺出版社版『宛如約』（一九八七）の「校点後記」（筆者蕭相愷氏）は中国社会科学院文学研究所および天津人民図書館に蔵する「清初写刻本」とパリ国家図書館・南京図書館に蔵する酔月山居刊本をあげている。整理すれば、現在書目等から知られる版本は次の三種ということになる。

- ① △本衙蔵板▽本
- ② 「清初写刻本」
- ③ 酔月山居刊本

酔月山居刊本は上海古籍出版社「古本小説集成」および中華書局「古本小説叢刊」に影印されており、春風文艺出版社「明末清初小説選刊」にはこれに拠ったという排印本が入っている。「古本小説叢刊」の影印本で見ると、この酔月山居刊本は封面に「惜花主人批評／宛如約／酔月山居梓行」とあり、序文の類はなく挿図もない。目録首行に「新刻才美巧相逢宛如約」と題し、本文首行には「新鐫才美巧相逢宛如約」と題する。半葉十一行、行二十六字。写刻である。「古本小説叢刊」第一輯前言によれば、「清初写刻本」に拠って重刊したもので、若干の文字の誤りがある以外は基本的に同じだという。

中国社会科学院文学研究所等に蔵するいわゆる「清初写刻本」の詳細は不明であるが、『中国通俗小説書

目』によれば半葉九行、行二十字または二十一字、二十二字だという。『中国通俗小説総目提要』によれば全称「新鐫才美巧相逢宛如約」、「惜花主人批評」と題するという。「古本小説叢刊」第一輯前言によれば、不分卷、十六回。同「叢刊」『宛如約』に影印されている第十二回末葉（半葉九行、行二十二字）を見ると、版木の摩滅が甚だしい。第十一回第二葉に一箇所だけ「批語」が入っているという。

著録からすると、いわゆる「清初写刻本」も酔月山居刊本も日本国内には伝存しないようで、原本を見ることができないのは残念であるが、しかし、『宛如約』の版本として最も重要なのはこの二つのいずれでもなく、筑波大学附属図書館に蔵する△本衙蔵板▽本である。その概略は次のとおり。

△本衙蔵板▽本 十六回

封面は欄上に「簇新小説」と横書し、枠の中は三行に「天花蔵主人編次／宛如約／本衙蔵板」。封面のみ藍印である。序文にあたる「小引」を有し、その末尾に「天花蔵主人題」とする。次に目録（目次）があり、首行は「新鐫宛如約目錄」、次行は「天花蔵主人編次」となっている。無図。本文首行は「新鐫批評綉像才美巧相逢宛如約」と題する。行款は半葉八行、行二十字、無界である。圈点○を使用する。版心は「宛如約」〔魚尾〕第□回〔葉数〕。「小引」、目録、本文等すべて写刻である。

版本の姿は『玉嬌梨小伝』『飛花咏小伝』『画図縁小伝』『定情人』などと酷似する。また、天花蔵主人（墨浪子）作品のうち、この版本と同じく封面を藍印にするものに『西湖佳話』がある。

序文に相当する「小引」は、その内容自体も勿論重要であるが、これとほとんど同じ文章が『平山冷燕』の一本に見られるのは、『宛如約』と『平山冷燕』との関係の深さを示すもので、特に注目される。『平山冷

燕』の版本のうち、順治戊戌（十五年）に書かれた序（「四才子書序」）をもち「天花蔵主人批評平山冷燕四才子書蔵本」と題するものがあって、人民文学出版社「中国小説史料叢書」および三民書局「中国古典名著」の一として排印されているが、残念ながら原本は見られない。人民文学出版社版の「校点後記」によれば版本の封面の欄上に「古本宋体」と題するというから⁽²⁾、仮にこれを「宋体本」と称することにするが、排印本で見ると、この宋体本には各回に評が附されているほか、目次と本文との間に「評曰」で始まる文章が掲げられている（人民文学出版社の排印本にならって本稿でもこれを「総評」と呼ぶことにする）。これが『宛如約』「小引」と一部を除いて同文なのである。異なるのは「小引」で「若伝汚流穢、又小説家之罪人也」となっている文が、「総評」では後にさらに「烏足道」の三字を続けている点、および「小引」で文章全体の終りが「予之『宛如約』、豈可以小説名乎哉」となっているのが、「総評」では「此『四才子』不可以小説名之、惟『四才子』始可以小説名之」となっている点だけである。

「小引」、目次、本文等の書体（すべて同一筆跡に見える）の適勁なこと、刻字の精巧なことは、とうてい翻刻本の及ぶところではない。

内容から言っても同様で、この△本衙蔵板▽本の本文を後の版本と比較してみると、これが信頼のおける版本であることは容易に確認できる。例えば、第四回の、司空約が列眉村を訪ねて趙媽媽に宿を借りるくだり。酔月山居刊本では、初対面の趙媽媽と二言三言やりとりしたかと思うと、名乗りあつてもいないのに身許も名前も既知のこととして話がすすみ、いつ始まったのか酒食のもてなしまで受けていたことになっている。この瑕疵は作者の不手際のせいではなく、△本衙蔵板▽本で言えば第十三、十四葉に含まれる叙述が脱落したために生じたのであって、翻刻の際に使用した本がこの二葉を缺いていたために、つじつまを合わせ

るための六十数字を補ったものであることは明らかである。酔月山居刊本には第五回にも同様の例があり、
△本衙蔵板▽本と照らし合わせてはじめて、恰も第五、六葉に相当する六四〇字がそっくり脱落していることが判明する。

大きな脱落だけではない。春風文芸出版社版『宛如約』の校点にあたった蕭相愷氏が、底本に使用した酔月山居刊本を恒徳堂石印本および説文社本によって校勘した「校記」を作成して同書に附載しているが、文意不通のままの箇所や復元不能の脱字も残っている。しかし、その多くは△本衙蔵板▽本によって正すことができる。例えば第三回の「朝窺陌上、夕覽帰興」の文（△本衙蔵板▽本では第五葉）は、酔月山居刊本では「興」字が脱落していて、判読不能である。また、例えば第十五回の「已立誓不与他和好」の文（△本衙蔵板▽本では第九葉）は、酔月山居刊本では「已立行人道他和好」となっていて、まったく文をなしていない。翻刻によって生じた大小の錯誤や不備は、この△本衙蔵板▽本によってほとんどが正されるのである。

筑波大学蔵本は全五冊のうち第四冊（第十回から第十二回まで）を缺いている。缺けた第四冊以外の各冊は、いずれも前表紙の裏に松、獅子、蘭を組み合わせた玲瓏愛すべき小図を多色で刷ってあり、これが原装本であることを示している。版本の価値を考えると、第四冊を缺いているのは、はなはだ惜しまれる。

この△本衙蔵板▽本は、第一に原刻本の風格をそなえていること、第二に天花蔵主人作品の版本の多くと共通した特徴をもっていること、第三に天花蔵主人が「小引」において自分の作品であることを明言し、かつ封面・目録に「天花蔵主人編次」と題していること等の理由で、三種の版本のなかで最も重要な版本である。

△本衙蔵板▽本の態様から見ただけでも、『宛如約』が天花蔵主人自身の作品であることはまず疑いない

と言えるであろう。それでは、版本の態様以外の面ではどうか。天花蔵主人の手になった「似くである」と、譚正璧・譚尋両氏がすでに指摘しているが、具体的な比較、分析が必要である。

以下、△本衙蔵板▽本によって形式面、内容面、用語面から『宛如約』を天花蔵主人（墨浪子）の諸作品と比較してみる（筑波大学蔵本に缺いている第十回から第十二回までの三回分については、参考までに酔月山居刊本によって補い、区別のために当該の回には*印を附することにする）。

二

天花蔵主人（墨浪子）作品と『宛如約』とは、分回のし方や回目の形式、回前・回末の形式、段落を締めくくる形式、語りかけの形式等において、同一であるか共通した特徴をもっている。また、天花蔵主人（墨浪子）独自の「柳梢青」詞の破格形式が『宛如約』においても採用されている。

（一）分回と回目

『宛如約』は全体を十六回に分ける。天花蔵主人（墨浪子）作品の大部分が十六回または十八回または二十回に分回し、それ以外の分回は極めて少数である。うち『飛花咏小伝』『画図縁小伝』『定情人』『賽紅絲小説』『鱗児報』などが十六回に分け、『宛如約』と同じである。

『宛如約』の回目は字数不定（七字または八字、九字、十字、十一字）の双句になっている。天花蔵主人（墨浪子）作品で言えば、『平山冷燕』宋体本（七字または八字、九字、十一字）、『両交婚小伝』（七字または八字、十字、十一字、十三字）、『飛花咏小伝』（八字または十字、十一字、十二字）、『玉支機小伝』（八字または九字、十字）、『画図縁小伝』（七字または八字、九字、十字、十一字、十三字）、『定情人』（八字また

は九字、十字、十一字、十二字、十三字、十四字）、『鱗児報』（七字または八字、九字、十字、十一字、十三字）、『醉菩提』（五字または七字、八字、十字、十一字）などが回目を双句にしている。『宛如約』の第二、五、六、十三、十四回の回目は本文と「目録」で小異があるが、本文と目次で回目の字句が異なるのは、天花蔵主人（墨浪子）作品にまま見られることである。

（二）回前の形式

『宛如約』はすべての回の回前に詞を置き、かつ二回ずつを組にして同一詞牌を用いる。詞の前に「詞云」（第一、二、三、七回）または「詞曰」（第四、五、六、八、九、十三、十四、十五、十六回）の二字を置き、詞の後には、必ず「右調×××」の形で詞牌を明示する。天花蔵主人（墨浪子）作品は回前に詩を用いることがあり、その場合は「詩曰」または「詩云」とする。しかし、詞を用いる場合は前に「詞云」または「詞曰」、後に「右調×××」を置き、『宛如約』と基本的に同形式である。なお、天花蔵主人（墨浪子）作品のうち、この『宛如約』と同じく、すべての回の回前に詞を置き、二回を組にして同一詞牌を用いるものに『両交婚小伝』および『玉支機小伝』がある。

（三）詞牌

『宛如約』で回前詞に用いられる詞牌は「踏莎行」（第一、二回）「菩薩蛮」（第三、四回、第十一、十二回）「卜算子」（第五、六回）「憶秦娥」（第七、八回、第十三、十四回）「点絳脣」（第九、十回）「柳梢青」（第十五、十六回）である。詞牌の好みという点で、『宛如約』と天花蔵主人（墨浪子）作品とは同じ傾向を示している。『宛如約』の回前詞に使用されている詞牌はすべて天花蔵主人（墨浪子）作品でも使用されているもので、それ以外のものはない。『宛如約』では「菩薩蛮」詞および「憶秦娥」詞は重複して回前に使

用されているが、このような例は他の作品にも見られる。『定情人』（「虞美人」）、『鱗児報』（「点絳脣」）、『梁武帝西来演義』（「踏莎行」）などがそれである。

これらの詞牌のうち、「柳梢青」詞は特に重要である。天花蔵主人（墨浪子）の『平山冷燕』『両交婚小伝』『飛花咏小伝』『玉支機小伝』『画図縁小伝』『定情人』『賽紅絲小説』『鱗児報』および『醉菩提』『西湖佳話』においては「柳梢青」詞および「霜天晓角」詞がいずれも独自の破格形式で作られており、それらの作品が同一作者の手になったことを示す有力な証拠の一つとなるからである。

そこでこれを少し詳しく見てみると、『宛如約』において「柳梢青」詞は第十五回および第十六回の回前詞のほかに、第八回本文に作中人物の作として六首があげられ、併せて八首が見える（3）。

①第八回本文の「柳梢青」詞第一首（司空約の作）

四十九字（四韻）六（韻）四四六（韻）。四（韻）九（韻）四四四（韻）

②同第二首（司空約の作）

四十九字（四韻）六（韻）四四六（韻）。四（韻）九（韻）四四四（韻）

③同第三首（趙宛子の作）

四十九字（四韻）六（韻）四四六（韻）。四（韻）九（韻）四四四（韻）

④同第四首（趙宛子の作）

四十九字（四韻）六（韻）四四六（韻）。四（韻）九（韻）四四四（韻）

⑤同第五首（司空約の作）

天花蔵主人編次宛如約について

四十四字〔四韻六韻四四四韻〕。四韻六韻四四四韻〕

⑥同第六首（司空約の作）

四十四字〔四韻六韻四四四韻〕。四韻六韻四四四韻〕

⑦第十五回前回詞

四十九字〔四韻四四四韻四四四韻〕。六韻七韻四四四韻〕

⑧第十六回前回詞

四十九字〔四韻六四四六韻〕。四九韻四四四韻〕

『宛如約』の「柳梢青」詞は、すべてが同一形式で作られているわけではなく、いくつかの形式が混在していることが分かる。第一に、通常の格律に従ったもので、⑦第十五回前回詞がそれである。第二に、天花藏主人独自の形式に従ったもので、①第八回本文の「柳梢青」詞第二首（司空約の作）、②同第二首（司空約の作）、③同第三首（趙宛子の作）、④同第四首（趙宛子の作）および⑧第十六回前回詞がそれである（ただし⑧は韻に不備がある）。第三に、通常の格律から天花藏主人の形式からはずれたもので、⑤第八回本文の「柳梢青」第五首（司空約の作）および⑥同第六首（司空約の作）がそれである。

天花藏主人（墨浪子）は独自の破格形式によって「柳梢青」を作る。このように破格形式のなかに通常の形式が混在する状況は、天花藏主人（墨浪子）作品が否かについて慎重な検討を必要とする『人間楽』は別として、他の作品では見られないことである。しかし、そのことが直ちに天花藏主人（墨浪子）の作たることを疑わせるわけではない。重要なのは、この『宛如約』にも天花藏主人（墨浪子）独自の形式によって作

られた「柳梢青」詞が含まれているという点である。『宛如約』において複数の形式が混用されているのは、天花藏主人（墨浪子）が「柳梢青」詞を独自形式に固定する以前にこの作品を執筆したためとも考えられる。

（四）回末の形式

「只因……、有分教……。不知……、且聽下回分解」が『宛如約』の回末の基本形式である。第四回のみは「有分教」の語を缺いている。「不知……」の部分は第十五回が「不知後來如何」であるほかはすべて「不知後事如何」である（第十二回は不明）。社会科学院蔵本では第十二回は「正是……。只因……、有分教……。不知……、且聽下回分解」の形である。天花藏主人作品において、回末の形式は基本的に「只因……、有分教……。不知……、且聽下回分解」であり、「不知……」の部分は「不知後事如何」になることが多い。『宛如約』の回末形式はこれと完全に一致する。第*十二回だけに見える、基本形式のまえに「正是……」を置いた形も『定情人』『賽紅絲小説』『麟兒報』などに使用例がある。

（五）段落を締めくくる形式

『宛如約』では段落を締めくくる形式化した語句として「……不題」（第七、十五回）と「且按下不題」（第二、四、五、七〔2〕、八、九、*十、*十二、十四回〔2〕）が使用される（なお酔月山居刊本では第十回に「只得且按下不題」が使用されている）。天下藏主人（墨浪子）作品において段落を締めくくる形式は「……不題」および「（且）按下不題」、「（且）按下……不題」など「按」字系統の語句に偏っているのが特徴であるが、『宛如約』も同じ特徴を示している。また、通俗小説において一般に「不題」と並んで多用される「不在話下」を天花藏主人（墨浪子）は使用しないが、この点も同様である。

(六) 語りかけの形式

天花蔵主人（墨浪子）作品では明末清初の通俗小説に普通に見られる読者と作者のあいだの架空の間答が見られず、また架空の間答や読者への語りかけに使用される「看官」「説話的」「在下」「小子」などの語を用いないが、『宛如約』はこれらの点でも符合する。天花蔵主人（墨浪子）作品において比較的多用される「你道……」系統の語りかけは、『宛如約』では「你道……？ 原來……」の形で第一回および第*十回に使用例がある。

三

次に内容面について見てみると、天花蔵主人（墨浪子）作品からまず感得されるのは、その濃厚な文人趣味である。この作者は自らの文人としての立場を絶えず意識し、それを作品の前面に出している。作品の主題も情節（筋立て）も人物造形も作者の文人意識によって強く規定されており、「詩酒山水」の四字によって代表される文人の嗜みから隔絶した生活を描く作品はむしろ例外に属する。文人意識が強く出ているのは『宛如約』もまったく同様である。

主題および情節で言えば、『宛如約』と天花蔵主人作品『平山冷燕』『玉嬌梨小伝』とが多くの共通点をもっていることを、すでに林辰氏が指摘している（前掲書）。すなわち、『宛如約』において、趙宛子が詩才を試して婿選びをするところ、李公子が横車を推すところ、「賜婚」によって決着がつけられるところ、李尚書・晏尚書が意趣返しをするところ、司空約が女性を訪ねまわるところ等は、いずれも『平山冷燕』『玉嬌梨小伝』に類似の情節がある。また主題に関しては、第一に男に劣らないものとして女子の才をたたえ

る、第二に家長が開明である、第三に男も女ともに「情種」（情の人）であり「才美」を尺度として相手を選ぶ等、『宛如約』と『平山冷燕』『玉嬌梨小伝』とは主題思想が密接に通いあっている、というのが林氏の指摘である。

主題、情節におけるこのような吻合・類似を影響とか模倣とかによって説明する林辰氏の所説は当たっていないが、『宛如約』が『平山冷燕』『玉嬌梨小伝』と主題、情節において呼応・符合していること自体は紛れもない事実である。

主題、情節については、このことを確認するにとどめて、ここでは、人物造形の特徴という点から見ることにする。

(一) 出生

天花蔵主人（墨浪子）の作品では、伝を立てる意識から出てくるものであろうが、主人公の出生に遡って語ることが多い。『宛如約』も同様に趙如子の出生に言及し、出生時に異兆の現われたことを述べて次のようにいう。「最も不思議なのは如子が生まれた年、村中の桃や李すももが一枝の花も咲かせなかったことである」。他の作品でも『平山冷燕』『画図縁小伝』『定情人』『麟児報』などが主人公の出生にまつわる異兆を語っている。『西湖佳話』『三台夢蹟』では于謙が生まれたとき、杭州では三年というもの桃も李も花をつけなかったし、彼が生まれた日、風雨激しく稲妻がはしるという異変があったことを言う。『西湖佳話』『錢塘霸蹟』の錢鏐は、生まれたときに「怪徴」があつたために、一度は両親から遺棄される。また『西湖佳話』『岳墳忠蹟』の岳飛は張飛の生まれ変わりとなれ、『醉菩提』の済顛は羅漢の化身とされている。

趙如子の出生に際して現われた異兆を「秀氣がすっかり如子に奪われたためであらう」と説明し、また

その両親が早くに亡くなったことについても、趙如子が生まれたときに「秀氣を奪いつくしたため」と理由づけている。この「秀氣」は言うまでもなく天花蔵主人（墨浪子）が多くの作品で繰り返し言及する「山川秀氣」や「天地精華」と同じものである。人の出生によって人に移っていく天地山川の気は全体量に限りがあるという考え方もいくつかの作品に見られる。『平山冷燕』においては、燕白頰が山黛の詩才と慧敏に感服して、「天地の人を生む精氣は、この美人を生んだところで発泄しつくしてしまったというべきだ」と言い（第十四回）、『玉支機小伝』においては、「山川の秀氣は泄発して余すところなしと思いきや、天地の精華は生々尽きず、のちにまた一人の高人を生んだのである」云々と述べる（第一回）。『西湖佳話』『三台夢蹟』においては、于謙が生まれてから三年というものの杭州では桃も李も花をつけなかったのは、西湖の「靈秀の氣」「正氣」が于謙の身に移ったからであると説明している。

（二）才貌、智謀の比喩

『宛如約』においては、主要人物の才貌を表現するのに衛玠（第三、十一回）、曹植（第十六回）、李白（第二、三、八、九、十四回）、杜甫（第六、八、十四回）、西施（第二、三、五、六、八、十三回）、班昭（第九回。謝道韞と併称）、謝道韞（第三、六、九、十三、十四回）を、智謀を表現するのに諸葛亮（第五回）、張良（第五回）を引き合いに出し、また「双棲」（一夫二婦の婚姻形態）の手本として女英・娥皇（第九回）を引き合いに出している。これらの人物の典故はすべて天花蔵主人（墨浪子）作品で用いられているものばかりである。

天花蔵主人（墨浪子）作品において、なかでも頻繁な言及が際立つのは李白、謝道韞および西施であるが、『宛如約』もその例にもれない。

李白の例を拾ってみると、第二回、司空学士が趙如子の詩を読んで、「もしも唐の世に生まれていたならば、太白だけに清平調の名をほしいままにさせることはなかったでしょう」と、その詩才を褒める。『宛如約』では主として司空約の詩才に関連して李白を引き合いに出すが、この場面では趙如子が男装しているので、司空学士は男子と思いこんで李白になぞらえたのである。第三回、司空約のことを叙して、その挙止の風流なことは「衛玠の後生」、詩文の巧妙なことは「青蓮の再生」と。第六回、趙媽媽の言葉に、「話によりますと、李白の清平は酔後にできたそうすし」云々。第八回、趙宛子の女中が司空約に、「聞きますれば、才は李杜をしのぐとやら」。同じく第八回、司空約の「柳梢青」詞に、「有杜何嘗没李」の句。第十四回、趙如子の言葉に、「筆は子美の奇を分かち墨は青蓮の秀を奪うとはいひましても」云々。

李白の酒にまつわる故事を諷刺に用いた例もある。第九回、趙宛子が呑んだくれの李最貴をあてこすつて、「曾在長安市上眠」「筆花応吐作青蓮」という詩句を作っているのがそれである。天花蔵主人（墨浪子）は李白の酒にまつわる故事を好んで引き合いに出すが、このように諷刺に用いるのは珍しい。

『宛如約』の女主人公趙如子の原型は西施（西子とか夷光とか呼ばれる）である。言わば当世風の西施として造形されているのが趙如子なのである。第二回、司空学士が趙白（趙如子）に息子の司空約のことを「遊学に名を借りてあちこち放浪し、苧羅の旧跡、桃葉（晋の王献之の愛妾）の故地を訪ねようとしているが、いまもつて場所がわかりません」と紹介しているのは趙如子を西施になぞらえる伏線である（苧羅は西施の生地）。司空約が「不知何処苧羅村」と詠んだ詩に和して、早くも趙如子は「苧羅涎慕垂於古、西子而今别有村」の句を詠み（第二回）、「若真要識夷光面」の詩句を詠んで（第三回）、自ら西施に擬している。第五回から第六回にかけて、列眉村を訪ねた司空約が趙媽媽とのやりとりで、「浣紗の^{あぐろあひ}遇」などの言い方

をしているのは、言うまでもなく西施が紗を流^すいだ故事である（司空約の言葉に「西子の紗を流ぐなり」云々。趙媽媽の言葉に「あれに紗を流^すぎに出てこさせたいと思っても」云々、「あれに会いたいのでしたら、わたしの家を流紗の地とするしかありません」、「もしもさらに流紗の遇をお望みなら」云々）。第六回、趙媽媽のはからいで密かに趙如子の姿を見、如子の作った詩を読んで驚喜した司空約は、「西子復生の仙貌、杜陵再生の美才」と褒めちぎっている。第十三回の回末で次回^の展開を予告する文には、「荒村に西子の輝を揚げ、茅屋に謝姫の色を生ず」（原文の「楊」を「揚」に改める）とある。

この第十三回回末の文中の「謝姫」とは謝道蘊のことである。謝道蘊もまた西施と並んで天花蔵主人（墨浪子）が好んで引き合いに出す人物で、詩才ある女子の喩えとして、そのほとんどの作品に現われる。多くの場合「咏雪」の語を用いるのは、謝道蘊が雪を柳絮に見立てた故事（『世説新語』『言語』）を踏まえたもの。『宛如約』に見えるのは、趙如子が西湖・断桥近くの酒楼の壁に書きつけた詩の一句、「千秋咏雪却須才」（第三回）、司空約の言葉「咏雪だの題蕉だのいうのも作り話です」（第六回）、趙如子が趙宛子に言う言葉「男子でも才あるひとはめつたにいません、女はなおさらです。どうか咏雪を心得ているだけで心を寄せます。ましてあなたは……」（第十四回）等である。

内容面では、ほかに作中人物の名づけ、改姓改名や変装などの趣向においても、『宛如約』と天花蔵主人（墨浪子）の諸作品は軌を一にするが、ここでは省略する。

四

多くの作品を残している作者であれば、その作者が好んで使用する語句、言いまわしは自ずと浮かび上

がってくると期待してよい。

天花蔵主人（墨浪子）の用語面の特徴が最も顕著に現われているのは、作中人物の感情の変化を叙述する語句においてであろう。特に「喜」「怒」「驚」系の語句の、ほとんど濫用に近い多用ぶりは重要な目印である。そこで、『宛如約』に使用されている「喜」「怒」「驚」系の語句を抜き出してみると、次のとおりである⁽⁴⁾。丸括弧の中の漢数字は回を、角括弧の中の算用数字は同一回^に二回以上出現する場合の出現回数を表す。

「喜（而……）」（七、十四）「自喜」（二）
「大喜」（一〔2〕、二〔4〕、三、五〔2〕、六、七、九、*十〔3〕、*十一〔2〕、*十二、十三〔3〕、十四〔3〕、十六〔2〕）「不勝大喜」（四、五、十四）
「不勝之喜」「喜之不勝」（六、七、十四〔2〕）「不勝心喜」（十五）「喜動顔色」（九）「回噴作喜」（三）
「喜孜孜」（六、九）「喜道」（*十二）
「喜得……」「直喜得……」（六〔2〕、*十）
「大悦」（*十二〔2〕、十六）

「歛喜」（二〔2〕、四〔2〕、五、六〔3〕、八、九、*十〔3〕、*十一〔3〕、十三、十四〔2〕、十五）
「你歛我喜」（十四）
「満心歛喜」（一、三〔3〕、四、五〔2〕、七、*十二、十三〔3〕、十五、十六〔2〕）「満心的歛喜」

〔七〕「不勝歡喜」〔五、六〔2〕、*十二〔2〕、十四〕「甚是歡喜」〔一、五、八〕「十分歡喜」〔*十二〕
「実実歡喜」〔十三〔2〕〕「歡歡喜喜」〔八、*十、十三、十四、十六〕「歡喜無尽」〔七〕「歡喜不勝」
〔七、*十一〕「歡天喜地」〔十五〕
「歡喜得……」〔*十〕

「喜飲」〔一、十三〔2〕〕

「驚」〔三、十三〔2〕〕

「大驚」〔四、*十、*十一、十五〕

「暗驚」〔四〕「喫驚」〔三〔3〕、四、五〔2〕、六〔3〕、九〔3〕、*十、*十一、十三〕「着驚」〔九

〔2〕、*十、十六〕「驚訝」〔三、四、十三〕「彼驚我訝」〔十四〕「驚慌」〔六〕「驚異」〔三、*十二〕「驚

倒」〔一、八〕「驚服」〔*十〕「驚惶無措」〔十五〕「心驚胆碎」〔十三〕「驚問」〔二、九〕

「驚得……」「直驚得……」〔三、六、*十一〕

「驚喜」〔五、七、八、十三、十四〔2〕〕

「又驚又喜」〔二〔2〕、三、六、七〔2〕、八、*十一、十三、十四〔2〕〕「驚驚喜喜」〔四、十六〕「十

分驚喜」〔六〕「大驚大喜」〔十三〕「驚喜不定」〔八〕「驚喜欲狂」〔八〕

「驚喜得……」〔八〕

「大怒」〔九、*十一、*十二〕「不勝大怒」〔*十二〔2〕〕

「含怒」〔九〕「震怒」〔十五、十六〕「佯怒」〔十五〕「怒說」〔十五〕「怒喝」〔十六〕

右に抜き出した「喜」「怒」「驚」系の語句は、合わせて使用回数を数えると、計一八九回。全十六回およそ二四五葉であるから、ならずと四葉に三回弱、字数では四一五字に一回の割合でこの類の語句が出現する計算になると言えば、その頻出ぶりを窺うに足りよう⁽⁵⁾。

天花蔵主人（墨浪子）作品では、第一に、「喜」「怒」「驚」系の語句の使用頻度が全体として際だって高い。第二に、「歡喜」「驚喜」およびこの二語の強調形を多用する。別の作者の作品で「歡喜」「驚喜」を天花蔵主人（墨浪子）のように多用する例はおそらくない。「歡喜」の強調形のなかでは「満心歡喜」が最も多用され、「驚喜」の強調形では「又驚又喜」の使用が最も多い。第三に、「喜」「怒」「驚」に「大」字を加えただけの強調形「大喜」「大怒」「大驚」を比較的多用し、特に「大喜」を多用する。この「大喜」の多用は当然「歡喜」「驚喜」の多用とも関連しているであろう。要するに、この三点が一体となつて、他の作者とは異なる天花蔵主人（墨浪子）独自の用語上の特徴を形づくつていると言えるが、『宛如約』はこの特徴を共有している⁽⁶⁾。

他の作者の作品で「喜」「怒」「驚」系の語句の使用状況を見てみると、『西遊記』がよく似た傾向を見せている。ここでは詳論をひかえるが、天花蔵主人（墨浪子）がこの面では『西遊記』に学ぶところが大きかつたことを推測させる⁽⁷⁾。

他に用語面の目安になると思われる点をあげると、ほとんどの天花蔵主人（墨浪子）作品から、特に作中

人物が好んで使う言葉として「果是真麼」「(不可)錯過」またはその変形、「孟浪」「唐突」などを拾うことができる。また、叙述に使用する「細細」「……」「説了一遍」なども、他の作者が使用しないわけではないが、天花藏主人(墨浪子)作品では頻度の差はあれ、ほぼどの作品にも現われるという点では、一応注目してよさそうである。『宛如約』では、「果是真麼」(第六回)「不能錯過」等(第三回)「孟浪」(第二回)「唐突」(第二回)「細細」「……」「説了一遍」(第五、十三回)などが見られる。

おわりに

〈本衙蔵板〉本の版本の風格からしても、また天花藏主人(墨浪子)の諸作品との形式面、内容面、用語面の対応からしても、『宛如約』が天花藏主人(墨浪子)の手になった作品であることは些かの疑いもない。従来「惜花主人」という正体不明の人物との関係でのみ取り上げられてきた『宛如約』であるが、改めて天花藏主人(墨浪子)の作品群のなかに位置づけて見直しをする必要がある(8)。

天花藏主人に関連づけられながら、実際の作者については必ずしも定論をみるにいたっていない一群の作品のほとんど、および墨浪子の名で出された『醉菩提』『西湖佳話』は、実は形式面においても内容面、用語面においても、互いに多くの共通点を持ち、独自の作風を示している。それらの作品が少なくとも完成段階においては同一人物の手になったものであることは明白であり、「天花藏主人」および「墨浪子」を名乗る人物こそがそれらの作品の実際の作者であることは疑いない。しかし、天花藏主人に関連づけられながら、これまでの材料だけでは実際の作者が天花藏主人なのか否かの判定を保留せざるを得ない少数の作品が存在することも事実である。まぎれもなく天花藏主人作品であることを版本によって確かめ得る『宛如約』

は、そうした作品の研究にも新たな材料を提供するにちがいない。

なお、『宛如約』の成書年代について一言触れておきたい。

〈本衙蔵板〉本はその刊行年を明記しておらず、現在のところ、この作品がいつ執筆、刊行されたかを直接知るすべがない。

林辰氏は、『宛如約』の書名は『金瓶梅』や『平山冷燕』『玉嬌梨小伝』などと同じく作中人物の名前をもとにしているが、「才美巧相逢」の文字を加えたのはそれらの作品とは異なる新味を出す意図によるもののように考えて、『平山冷燕』『玉嬌梨小伝』よりも後、すなわち順治十五年以後、下限は康熙二十年頃までの間に作られたとする(前掲書)。私見はそれと異なる。

はじめに触れたように、『宛如約』に附された「小引」は『平山冷燕』宋体本の「総評」とほとんど同文であるが、この事実は『宛如約』の成書年代を推定する手がかりになろう。同一文章を共通に用いていることから見て、まず両書の成書年代は近接していると考えられる。『平山冷燕』宋体本の序文に「順治戊戌(すなわち十五年)立秋月天花藏主人題於素政堂」と記されているのをそのまま信するなら、『宛如約』の成書も、一応その前後ということになる。流用そのものを疑うわけにはいかないとすれば、先に『宛如約』のために書いた「小引」を『平山冷燕』に流用したか、そうでなければ先に書かれた『平山冷燕』「総評」をさらに『宛如約』「小引」として流用したかのいずれかである。いずれが先か。『宛』が先、『平』が後ではないか。

そのように考えるのは、主として『平山冷燕』における「総評」の納まり具合からである。『平山冷燕』

において「総評」に述べるところと各回の評は互いに呼応しており、齟齬があるわけではない。また、「総評」が本文と合わないということもない。したがって、各回の評および本文との関係において見るかぎり「総評」が『平山冷燕』という作品に入っていることに不自然はない。問題は序文（「四才子書序」）との関係で見た場合である。序文と「総評」の主旨が重なっているのはまだよいとして、まったく同一内容を重複して述べた箇所があり、序文に次いで「総評」を読んだ場合、なくもがな感は免れない。すなわち、天花藏主人は自分が通俗小説の作者となった動機を述べて、序文に次のように言う。「わたくしはその器ではないけれども、やはり窃かに雕虫の技に従ったのであった。時運の拙さを顧みては、ときには駢文を作ってみたり、ときには詔（文体の一）を書いてみたりしたが、他人の関心を引くこともなく、あつという間に老いてしまった。人に引き立ててもらって出仕したいと望んだがかなわず、ひとりで意気消沈しているのにも耐えられない。なす術なく、やむを得ず烏有先生を借りてその黄梁の事業を発泄するのである」⁽⁹⁾。ところが、その後に置かれた「総評」において、またしても通俗小説の作者となった動機を持ちだしている。「さて真正の才人が不知に屈し、無路に苦しんでいる。満腔の経綸と才思をいだきながら、いつまでも鬱屈の晴れることはなく、氣にかけてくれる人もない。笑うに笑えず哭くに哭けないというありさま。そこでやむを得ず紙上の黄梁を借りて胸中の浩気を吐き出すのである」⁽¹⁰⁾と繰り返しているのである。かりに「総評」がはじめから『平山冷燕』のために書かれたものだとしたら、このような反復は避けるはずのものであろう。少なくとも、「四才子書序」の後に置く文章として「総評」は上乘の作とは思われない。してみると、この「総評」はもともと『平山冷燕』のために作られたものではなく、「宛如約」「小引」を一部書きなおして流用したものと疑うべきではないだろうか。『宛』が先、『平』が後と考える所以である。

さきに取り上げた「柳梢青」詞の形式の問題は、成書年代と関係しているかも知れない。上記のごとく『平山冷燕』等においては「柳梢青」詞がすべて独特の破格形式になっているのに対して、『宛如約』にはいくつかの形式が混在しているが、天花藏主人（墨浪子）がこの詞牌を独自の破格形式に固定する前に『宛如約』が書かれたとするなら、この点も納得がいくのである。

ただし、『宛如約』の成書の確かな年代は、現在のところ要するに不明であつて、以上はあくまでも一つの推定というにとどまる。

注

- (1) △本衙蔵板▽本を蔵する筑波大学附属図書館において編集・刊行された『筑波大学和漢貴重図書目録稿』（一九八二）およびその改訂版『筑波大学和漢貴重図書目録』（一九九六）が△本衙蔵板▽本を著録することは言うまでもない。編著については「天花藏主人編」と記している。
- (2) 三民書局版の排印本に載せる書影では封面欄上の文字を「古本宋体」と読み取ることが不可能である。なお、二種の排印本のいずれも版本の所在を明らかにしない。
- (3) 「柳梢青」詞の原文は次のとおり。
 - ① 列眉村裡、有美趙家如子。巧扮書生、往来花下、細細求連覺理。詩逢知己、和將來・早吐柔情滿紙。精心潛訪、訪出嬌踪、方驚方喜。
 - ② 良緣有以、一片痴魂定矣。惟望烏紗、但思金榜、欲結風流首尾。何期到此、忽從天・又覩仙宮桃李。福難而享、才不双全、多忖是死。
 - ③ 東昌城裏、妾是趙家苑子。姓既相同、名仍相近、人事似存天理。人人有己、細思來・隔別無過一紙。他

纔得就、我再強成、応多悲喜。

④若詢所以、我自甘心已矣。捷足既先、頑蹄再逐、未免神龍見尾。 莫嫌多此、才場中・有杜何嘗沒李。洞房花燭、白面烏紗、別長生死。

⑤筆花飛瑞、自認一時無對。不料香奩、揮風灑雨、使人驚愧。 貪心已遂、才美而峰登最。何意垂簾、形管蛾眉、又来爭位。

⑥一揮一灑、早又散成五彩。情繫絲絲、心迷醉醉、怎生佈擺。 前盟難改、後約敢申山海？且逐京塵、百狂千結、聽天分解。

⑦心裡憎嫌、冤家相對、不自知慚。一樽美酒、幾塊香羹、身臟皆炎。 交章各犯威嚴、為兒女・心腸死恬。言詞尖厲、借語摧殘、誰肯謙謙。

⑧察出真情、君恩広布陽春。不賢醜婦、酒鬼兒郎、從今各悔前爭。 才子佳人、美滿處・成就篤求友盟。始信双栖、于飛二女、樂自天生。

(4) 『宛如約』に使用される感情表現の語句はこれにとどまらないが、「喜」「怒」「驚」系の語句に限ることとし、それ以外のものは除外してある(例えば「眉歡眼笑」)。ただし、「大喜」と同義の「大悦」のみはあげる。使役性の「触怒」(怒らせる)は除外する。

(5) 筑波大学蔵本は第十、十一、十二回を缺くために、全体の葉数を正確に数えることができない。この三回以外の回は、第六回、第八回、第十四回がそれぞれ十六葉、第十三回が十七葉であるのを除いて他はすべて十五葉であるから、缺けている各回を十五葉と仮定して算出したのが上記の数字である。字数で言えば、総字数は半葉八行二十字(一六〇字)の二倍(三二〇字)にこの推定葉数二四五を乗じて七八四〇〇字。四一五字に一回の割合で出現する計算になる。

(6) 『宛如約』の使用している語句はほとんどすべてが他の天花蔵主人(墨浪子)作品でも使用されている。

(7) 天花蔵主人(墨浪子)が文辞・用語の面で『西遊記』に学んだ形跡が認められる点は、この作者およびそ

の作品を考える上で重要と思われるので、いずれ稿を改めて検討したいと考えている。

(8) 酔月山居刊本に題する「惜花主人」の名は(八本衙蔵板)本のどこにも見えない。しかし、これが天花蔵主人(墨浪子)と無関係に、たとえば書賈が間に合わせにこしらえた架空の筆名かというところとも断定しかねる。『船載書目』に、元禄八年(康熙三十四年、一六九五)夏に惜花主人編次『春花新載』という書物が船載されたことが記録されている(ただし『商舶載來書目』は書名を『春花新裁』とし『分類船載書目』は『春花新載』とする。大庭脩編著『船載書目』、同『江戸時代唐船持渡書の研究』参照)。

(9) 宋体本の排印本によれば、原文は次のとおり。「余雖非其人、亦嘗窃執雕虫之役矣。顧時命不倫、即間擲金声、時裁五色、而過者若罔聞罔見、淹忽老矣。欲人致其身而既不能、欲自短其氣又不忍。計無所之、不得已而借烏有先生以發泄其黃梁事業」。第一字「余」は「古本小説集成」に影印する大連図書館蔵順治刊本では「予」となっている。

(10) 原文は次のとおり。「惟真正才人、屈於不知、苦於無路、滿腹経倫、一腔才思、抑鬱多時、無人過問、欲笑不可、欲哭不能、故不得已而借紙上黃梁、吐胸中浩氣」。